いけざわこどもクリニック通信

VOL.278
11月号

例年よりとても早くインフルエンザが流行の兆し。ワクチン接種は「咳、鼻」など軽症の場合（母子手帳があれば）その場で接種可能です。
高市早苗女性総理の誕生に日本中が沸いています。力強い所信表明に新しい時代を感じました。熱かった夏がやっと秋らしくなり、クリニックにもこの季節初めて月末に床暖房が入り、床暖のありがたさをしみじみ感じています。

院長　池澤　滋

感染症情報 9/22～10/26	前回	今回
アデノウィルス	3	5
溶連菌感染症	7	12
感染性胃腸炎	32	26
伝染性紅斑（りんご病）	1	23
手足口病	1	2
RS ウィルス	5	3
突発性発疹	5	7
おたふく風邪	3	0
ヘルパンギーナ	0	0
水　痘	1	3
新型コロナ	7	3
インフルエンザ A	3	3
ヒトメタニューモ	0	0

11月

★クリニック予約
★クリニックホームページ
★いけざわ beauty（インスタ）
★クリニック Instagram
こちらから→　→　→

実話「フォロワーの正体は、まさかの孫」

おばあちゃんのスマホを拝借して「もしもし（診察）見たい！」と動画を毎日見て下さっているお孫さんがおられました。スマホ依存が心配です💦

4コマまんが
作・絵
ちえこ&きみこ

チャレンジの音色

私たちの長女はオペラ歌手になり、東京で活動しています。娘は幼い頃から音楽が好きで、3 歳からピアノを習い始めました。

「この音符は？」「ド」「これは？」「ミだよ」。
まるで大きなおたまじゃくしのような音符たちを初めて見た時、鍵盤に指を置いて「ドレミレドドド♪」と弾いて、それが曲になった瞬間、目がまんまるになり、何か開花したような表情だったことを覚えています。それから楽譜を自分でめくり、次のページ、また次へと進めながら、鍵盤に指をのせて音がメロディーになる楽しさを知った娘。私が台所でパウンドケーキを焼いていたら、いつの間にか音が止み、見ると娘はピアノのそばで眠っていました。音符が読めたことが嬉しくて、眠たくなるまで弾いていたのです。
その姿を見て、私はふとヘレン・ケラーが水に触れ、サリバン先生に指文字で「water」と書いたあの瞬間を思い出しました。目も耳も不自由で言葉も発せないヘレンケラーが水の流れと指文字が結びつき「物に名前がある」と初めて理解したように。
時は経ち、中学生になった娘は合唱部で「N コン」全国大会に出場。歌に目覚め、上京するのと同時にピアノもバイオリンもやめてしまいました。どちらも本当に上手だったのに、勿体ないったらありゃしない。
東京の音大を卒業した今は、そのまま東京に住み、今も歌い続けています。家に置き去りになったバイオリン、このまま眠らせておくのは寂しい気がして。なんとそのバイオリンで私は 2 年前から教室に通い始めました。
そして先月、初めての発表会。演者席、3 歳児の隣でスタンバイする私。

緊張なんてしないと思っていたのに、右手は震え、習っていないビブラートがかかっていた（笑）。動画を見返すと、無表情で体も動いていない💦
土曜の診察を終え、慌ててタクシーで駆けつけた夫が演奏には不釣り合いな豪華な花束を渡して「千恵子、上手だったよ！おすまし、してたね」とポジティブなことを言う。

――でも、「おすまし」なんかじゃない。失敗したくない一心で、体が縮こまり、動けなかっただけ。大きく音を外したくない、そればかり考えていたのだろう。
こんな年齢で始めた弦楽器。指も思うように動かず、人と比べればレベルの差は歴然。普通なら「発表会も出たし、頑張ったし、もうこれでいいか」となるところだが、不思議とやめたい気持ちがなく、さらに上手になりたいとやる気が出てきた！気づけば、私もバイオリンが大好きになっていたのです。
娘がピアノの鍵盤に指を置き、大きく目を見開いたあの日から 25 年。60 歳を目前にして、私も音楽に直に触れ心を豊かにする時間ができた。大人になると、「間違うこと」が怖くなる。恥ずかしい、みっともない、そんな気持ちが新しい挑戦を遠ざけてしまう。でも、我が子には幾つになってもあきらめず挑戦して欲しい。だからこそ、親である私も弾き続けようではないか。
　子どもが巣立ち、静かな夜に響くバイオリンの音色。娘の音とはまったく別物だが、夫はもしかすると――遥か昔、娘たちが奏でていた音を思い出しながら、私の音を懐かしく聴いてくれているのかもしれない。
そして次の発表会では、怖がらず、葉加瀬太郎のように弓を高らかに反り上げてフィニッシュしたい（笑）。幾つになっても人生のどの瞬間にも、チャレンジの音色は鳴らせるのだと信じて！

文責　池澤千恵子